現地ルポ

雪印下総カブの採種

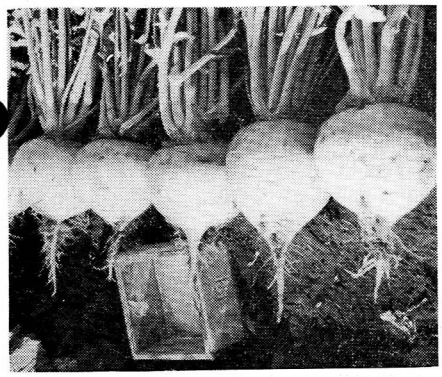
―千葉県香取地区の採種地帯―

雪印下総カブの圃場調査

雪印下総かぶは、とくに多収と貯蔵性の良いことで好評を得ておりますが、長くその能力維持のため、原々種、原種段階において、勿論集団淘汰を継続していると共に採種についても、特定採種農家を指定し、雑交のないよう厳重な圃場管理を実施しております。

今日、その指定採種地である千葉県香取地区に雪印下総かぶ採種組合の世話人である植田文吉氏宅を訪問、採種事情を聞く。

尚、植田文吉氏のプロフィルを簡単に紹介しますと、氏は昭和一〇年北海道庁立拓殖十勝実習場で実習終了され、昭和十五年農業技術者として、満州国立農試熊岳城支場に勤務するまで、北海道虻田郡狩太町で農場を経営、満州では途中戦時特別動員下命により応召、昭和二十年末復員と同時に昭和二十四年末まで、戦災援護(引揚)苗農場、岩手県立六原農場、千葉県立昭栄指導農場と勤務され、昭和二十五年、財団法人日本青年館所有の土地、建物などの全面解放により、ここで農業自営に踏切り、以降今日まで、飼料作物の契約採種を実施し、長年農場経営や試験場勤務など、農業の実践的指導的立場にたたれ、その進歩的農業理論は価値あるものであります。



多収な雪印改良下総カブ

一　相互信頼による採種種子の品質向上

当地は千葉県成田市と佐原市にはさまれた台地で、この辺一帯は北総台地と呼ばれている。当地帯は、冬期降雪はあまりなく、晩霜は五月上旬頃で、夏季はかなり暑い日が続く。冬作は麦類とかぶ、夏はそさい、水田が主体となっている。

当北総台地は、そさい種子の採種地帯として古くから知られている所で、近くに下総御料牧場がある関係で、昭和の始めころには下総かぶの採種も行われていた。その後、牧草類などの飼料作物関係の採種も試みられ、一時はこれら採種事業も一つの流行となったが、現在は殆んどの種子は採種契約の形をとり、種子品質の向上を計り、採種事業の安定化を見るようになった。

雪印下総かぶの採種は昭和二十八年より試作され、雪印下総かぶ採種組合結成と同時に約四〇名が、相互信頼に立って、圃場検査、高品質の維持、生産採種技術の向上等検討を重ねている。

二　採種事業の現況

直播と移植法が試みられ、直播の場合、主に陸稲跡地の刈株の間に九月に播種する。陸稲の株は、後で掘起せば、防寒上効果が大きい。西瓜、メロン、胡瓜などの果菜類の跡地では、普通移植法が試みられている。いずれも、培土時に堆厩肥、金肥を適量施用し、充実した種子生産の基礎を作り上げている。収かくは翌年五月上旬頃から開始、良株を刈取るため、殆んど手刈りにより、選別収かくしている。収量は年約一〇アール当り一二〇キロで、豊作の年では、一四〇キロ位は収かくされる。かぶ類はとくに水分過多になり易く、保存中の品質にも大きく影響を及ぼすので、精選脱粒時には、徹底して水分含量をチェックし、又純度についても、圃場検査により、他系統の混入の早期抜きとりによる純系の維持など、契約会社と採種農家の相互協力により、高品質の雪印下総かぶ種子を生産し、この種子が現在広く全国の酪農家に利用されているわけである。

（東京支店　近藤　隆）